様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７６０６０２

研究課題名（和文）鎌倉期禅院建築の意匠とその流通に関する対外交渉史的研究

研究課題名（英文）Research on the design and its propagation of the Zen Buddhism architecture in the Kamakura period

研究代表者
野村　俊一（Shunichi, NOMURA）

東北大学・工学（系）研究科（研究院）・准教授

研究者番号：４０３６０１９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、「禅宗様」の定着とその後の展開について、日本・中国の史料および伝統的建造物の調査、隣接領域での新しい学術成果を考慮しながら、対外交渉史の観点のもと個別具体的に解明することである。
唐代から元代までに創建された中国の建築や、鎌倉期から室町末期までに創建された日本の中世仏堂に関して、地域別・時代別に検討した結果、近代以降定着した「禅宗様」「大仏様」「和様」「新和様」「折衷様」といった様式概念のみでは認識・理解し得ない実態が散見された。また、大きく近畿・瀬戸内地方と東国とで中世仏堂の系譜に大きな差異がみられることもうかがえた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to solve it also as that of the viewpoint of the history of negotiations with a foreign country individually concretely about fixing of "Zen-style architecture", and subsequent deployment. In research, I took into consideration the historical records of both Japan and China, and investigation of a traditional building and the new scientific result in an adjoining domain.
The following became clear as a result of examination. As a result of inquiring a local exception and according to a time, many actual conditions which cannot be understood only with the existing style concept understood the Buddhist temple in China and Japan. Moreover, when Kinki and the Setouchi district were greatly compared with the east country, it turned out that the big difference in the history of a medieval Buddhist temple is seen.

研究分野：建築史

キーワード：禅院建築　東アジア　流通　意匠　鎌倉

１．研究開始当初の背景

13 世紀末、南宋杭州を経由して、中国から日本へ禅宗が本格的に移入するようになった。のちに禅宗は檀越を獲得しながら勢力を伸ばしていくが、14 世紀半ばになると、功山寺仏殿（山口）や善福院釈迦堂（和歌山）など、いわゆる「禅宗様」建築がつくられるようになり、14 世紀半ば以降ともなると、同じ類型の建築が日本全国でつくられるようになった。

このような歴史的背景があるなか、建築史学では太田博太郎、横山秀哉、関口欣也を筆頭に、禅宗様建築の実態や造営組織、建築の周辺環境に関する研究が進められてきた。しかし、13 世紀末から 14 世紀半ばまでのあいだ、すなわち、禅宗が中国から日本へ本格的に移入するようになってから禅宗様建築がつくられるようになるまでのあいだ、建築意匠に関する情報が、個別具体的にどのような経緯で中国からもたらされたのか、また、14 世紀半ば以降にどのような経緯で日本全国へと伝播していったのか、不明な点はまだ多いのである。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本に禅宗が本格的に移入され始めた 13 世紀末から、「禅宗様」建築が日本に登場したとみられる 14 世紀半ばまでのあいだに、禅院建築にみる個別の意匠がどのように中国からもたらされたのか、また 14 世紀半ば以降に、これらの意匠がそれぞれどのように日本各地へと伝播していったのかについて、日本・中国の史料および伝統的建造物の調査にくわえ、隣接領域での新しい学術成果を考慮しながら、対外交渉史の観点のもと個別具体的に解明することである。

３．研究の方法

本研究の目的を遂行するため、具体的に主題を以下のとおり二つ掲げ検討する。最後にこの検討結果を総合することで、鎌倉期禅院建築の意匠とその流通に関する歴史像を明らかにしたい。

(1)禅宗様・折衷様建築および宋・遼・金・元代中国建築にみる斗栱と軸組の変遷に関する研究

(2)鎌倉期に中国から禅院文化を移入し、また全国に伝播させた僧・工匠の造営活動および建築観に関する研究

４．研究成果

以下に成果の概略と、研究成果の一部を示す。なお、当初の予定を変更して、本研究の最終年度から、基盤研究 C（研究課題番号：26420639）に引継ぎ、さらなる発展的検討を継続している。

唐代から元代までに創建された中国の建築や、鎌倉期から室町末期までに創建された日本の中世仏堂に関して、地域別・時代別に検討した結果、近代以降定着した「禅宗様」「大仏様」「和様」「新和様」「折衷様」といった様式概念のみでは認識・理解し得ない実態が散見された。また、大きく近畿・瀬戸内地方と東国とで中世仏堂の系譜に大きな差異がみられることもうかがえた。

本研究でとくに留意したのは、栄西が造営したと考えられている東大寺鐘楼（図 1、2）である。この建築には詰組があり、台輪がない。

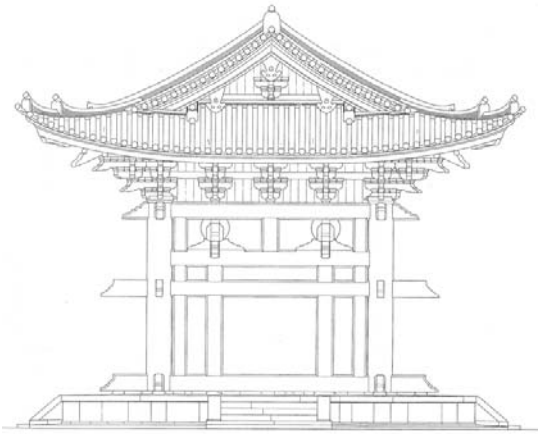

図１、２　東大寺鐘楼

栄西は 12 世紀の後半に 2 回中国へ渡っており、寧波など江南地方へ渡海したことがわかっている。しかも本土では重源とも同行している。彼らの渡海は仏教徒としては約 80 年ぶりのものだった。

帰国後の栄西は、東大寺大勧進職を重源ののちに引き継いでいる。重源が大勧進職だった時代に、陳和卿という人物が現在の福建省から新しい意匠と技術をもたらし、東大寺復興が成し遂げられたということは周知の通りであろう。しかし、陳和卿をはじめとする中国の工人たちは、東大寺側の日本人工匠たちとさまざまな確執があったこともわかっ

ている。例えば、陳和卿は瓦を焼く窯に瓦を投げ込んで嫌がらせをしたり、大仏殿を修復するための柱を勝手に抜き取って船の材料に充てようとしたりした。そのため、日本人工匠の中に陳和卿に対する不信感が募ってゆき、やがて東大寺工匠たちは彼を追放しようとしたのである。

興味深いのは、東大寺工匠たちが、その言い分の中で、すでに中国の新しい技術を取得したため、陳和卿ら中国人工匠たちは無用であると上申していることである。ここから、東大寺の工匠集団が、東大寺復興事業を通して、中国の技術を独自に修得したことをうかがえるのである。その後、栄西が東大寺大勧進職になるわけであるが、当然彼は、大陸の技術を習得した東大寺工匠たちと協働しているということになる。

時期的にみて、東大寺鐘楼は彼らのコラボレーションにより実現したと考えられよう。つまり、詰組があり台輪がないという意匠も、彼らにより成し遂げられた結果と理解することができるのである。

栄西は、中国に渡海したとき、禅院の修造事業に数多く関わっていた。東大寺大勧進職への就任は、重源との密接な関係もさることながら、その経験も評価されてのことと思われる。

栄西の中国における事跡で興味深いのは、彼が修造事業に携わっていたのが、時期と地域から見て、詰組があり台輪がない建物が多かった 12 世紀後半の江南地方だったことである。今後、より詳細な検討が必要となるが、東大寺工匠が修得した、福建省仕込みの陳和卿ら中国工人の技術と、栄西が経験を積んだ、江南地方の意匠や技術との複合により、東大寺鐘楼が完成したと推察することができるのではないだろうか。台輪がなく詰組がある建物の背景に、栄西の行状が何かしらの影響を与えたのではないかと推測するところである。

加えて留意したいのは、東大寺工匠の末裔は、東福寺の造営にも関わっていると考えられていることである。東大寺三門の中備に平三斗が採用され、なおかつ台輪がないという意匠は、東大寺鐘楼の背景を鑑みると、極めて興味深いものと言わざるを得ない（図 3）。

図 3　東福寺三門

さらにのちには、双斗以上の、すなわち斗を二つ以上採用した中備組物を採用し、かつ台輪がない建築が、近畿や瀬戸内に拡がっていった。この地域は、いわゆる「折衷様」の中世仏堂が数多い場であり、かつ西大寺流律宗の僧と東大寺工匠との協同があった場でもあると指摘されている。そしてこの地域に、「大仏様」建築や東大寺鐘楼に関する知識や経験が流通した様をみることができるのである。

以上の検証作業を今後も続けることで、当時の人たちがどのように建築の部分を理解し、かつ意匠を評価していたのかについて、さらには当時における〈様式〉なるものについて明らかにすることができるのではないかと考えている。近代以降に定着していった日本建築の様式概念を越えて、より実態に即した当時における建築の認識の構えについて検討を続けてゆきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①野村俊一、山水の生成とその諸空間――中世禅院における境致と社友の考察を通して、空間史学叢書１　痕跡と叙述、査読有、2013、pp.85-116

②野村俊一、中世寺院建築の意匠とその流通をめぐって――台輪・詰組・東アジア、「日本建築様式史の再構築」連続シンポジウム 8 中世建築における様式研究の再考、東京藝術大学、査読無、2012、pp.45-53

③野村俊一、鑁阿寺本堂の構成要素とその意義、鑁阿寺本堂調査報告書、東京藝術大学、査読無、2011、pp.115-132

〔学会発表〕（計３件）

①野村俊一、中世禅院の社友空間と風景生成、国際高等研究所 研究プロジェクト「宗教が文化と社会に及ぼす生命力についての研究――禅をケーススタディとしてー」2013 年度第 4 回研究会、2013 .2.17、京都国際高等研究所（京都府木津川市）

②野村俊一、禅院仏殿の行事と建築構成、国際高等研究所 研究プロジェクト「宗教が文化と社会に及ぼす生命力についての研究――禅をケーススタディとしてー」2011 年度

第 2 回研究会、2011 .12.17、京都国際高等研究所（京都府木津川市）

③野村俊一、中世寺院建築の意匠とその流通をめぐって――台輪・詰組・東アジア、「日本建築様式史の再構築」連続シンポジウム 8 中世建築における様式研究の再考、2011 .12.10、東京藝術大学（東京都台東区）

〔図書〕（計２件）
①島尾新、野村俊一他、東京大学出版会、東アジア海域に漕ぎ出す４　東アジアのなかの五山文化、2013、pp.204-213、221-228

②野村俊一、日本中世住宅を構成する建具・家具・道具とその流通に関する対外交渉史的研究、第一生命財団、2013、総 p.131

６．研究組織
(1)研究代表者
野村 俊一（NOMURA, Shunichi）
東北大学・大学院工学研究科・准教授
研究者番号：40360193